Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-07

高校生と大学生におけるサークル・テストによる時間的展望の検討-時間的態度と精神的健康との関連から-

日潟, 淳子

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,1(2):11-16

(Issue Date)
2008-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/80060019

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/80060019

KOBE UNIVERSITY

神戸大学大学院人間発達環境学研究科
研究紀要第１巻第２号　2008

研究論文

高校生と大学生におけるサークル・テストによる時間的展望の検討
―時間的態度と精神的健康との関連から―

A study on time perspective in high school students and university students by The Circle's Test
The relation of time attitude and mental health

日　潟　淳　子*
Atsuko HIGATA*

要約：時間的展望をとらえる投影法として過去，現在，未来を3つの円で描かせるサークル・テストがあるが，サークル・テストにおける発達的な視点での特徴は検討されていない。高校生と大学生では認知的側面である時間意識とそれらに対する時間的態度が異なることが示唆されるため，本研究ではサークル・テストを高校生と大学生に実施し，サークル・テストによる高校生，大学生の時間的展望の特徴をとらえることを目的とした。その結果，高校生，大学生ともに一般的特徴としては円の大きさを示す時間的優位性においては未来を一番大きく描く割合が最も高く，次いで現在，過去・同じ，となった。円の重なり方を表す時間的関連性においては交わって描く割合が最も高く，次いで分離して描く原子型，3つの円を同心円で描く包含型，接して描く接合型となった。時間的優位性，時間的関連性と時間的態度および精神的健康の関連には違いが見られ，高校生では未来を一番大きく描く者は精神健康度は低かったが，大学生では未来を一番大きく描く者は未来に目標を持ち，希望を抱き，未来に対してポジティブな態度が見られた。時間的関連性において高校生には関連が見られなかったが，大学生においては包含型が原子型よりも過去に対してポジティブな態度を示し，精神的健康度が高かった。

問題と目的

時間が時間として流れているという感じと自分が自分として存在している感じとは実は同じである（木村，1982）。人間にとって過去から未来への時間の流れを意識し，それらを現在の自己に意味づけることは現在の自己を意識する上で重要な視点であり，さらに，現在の行動や，現状の状況はそれにより影響を受ける。Cottle（1967）は個人の時間の知覚を理解することによって，その人が人生に与える価値や存在に対する意味づけをとらえることができるとして，人間の時間知覚に注目した。Cottle（1967）によれば時間の概念は空間的概念と直線的概念に分けられ，空間的概念は人がどのように時間の流れを感じているかという主観的な感覚であり，直線的概念は現実的な時間の流れに対する客観的な感覚であるとしている。このような時間の概念をふまえ，それらを投影的にとらえる手法としてCottle（1967）はサークル・テストを考案している。サークル・テストは過去，現在，未来を3つの円で表すように教示し，円の大きさによる時間的優位性（Temporal dominance），円の重なり方による時間的関連性（Temporal relatedness），円の大きさの順番による時間的発展性（Temporal development）を指標として個人の時間の知覚をとらえるものである。現在では，「ある一定の時点における個人の心理的過去および未来についての見解の総体」（Lewin，1942　末永（訳））として定義される時間的展望をとらえる投影的方法としてサークル・テストは位置づけられている。実施が比較的簡便であるのに加えて，時間的展望の諸側面である時間的態度，時間的志向性，あるいはその人の価値観や現在の行動に影響を及ぼしている時間的信念など多くの情報を得られるものとして時間的展望の研究で使用されている。また，臨床的な視点からは，サークル・テストを実施することにより，現在の状況が把握でき，同時に自分自身の過去を振り返り，将来の自分を思い描く良い機会になるとして面接の導入の一つに成り得ることも示唆されている（田中，1974；高橋，1985）。

このような特徴を持つ，時間的展望を測定する投影法としてのサークル・テストの有用性から，日本での実施に際し，Cottle（1967，1976）の指標および結果が適用可能であるのかという検討や，時間的展望の諸側面，あるいは人格特性とサークル・テストの円の形態との関連からサークル・テストに表れる特徴をとらえる研究がわが国でもなされてきた。

短期大学生，および大学生を対象とした研究では以下のような研究があげられる。田中（1974）はサークル・テストとＥＰＰＳ性格検査（Edwards Personal Preference Schedule）を短期大学生に実施し，さらに調査対象者のうち15名に個人面接を行っている。その

＊神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程

（2007年10月１日　受付
2007年11月１日　受理）

結果，時間的優位性は重要度，充実感，自己の成長などと対応し，特に未来が小さく描かれているときは不安や自己に対する悲観的な思いを示し，時間的関連性に関しては，それぞれの「時」の間の心理学的な関係を反映しているという結果を得た。しかし，ＥＰＰＳ性格検査との相関は見られず，その個人の生活意識のような基本的な心理状態を反映しているのではないかと考察している。同様に，高橋（1985）も短期大学生に実施し，描かれた円が単に物理的な時間の長さを意味するものではなく，充実感，希望の有無，優位性を反映しているとして妥当性を確認している。都筑（1984）も短期大学生にサークル・テストを実施した結果，優位性，展開性はその時制に対する態度を示すと報告している。しかし，関連性に関してはイメージに統計的な差は認められなかった。また，都筑（1999）は男子大学生に対してもサークル・テストを施行し，円の優位性から個人の過去，現在，未来に対する時間的態度を測定でき，関連性に関してはアイデンティティ地位との関連から，アイデンティティ達成地位にあるものは重なりが大きい統合的な3つの円を描くという結果を得ている。渡辺・赤嶺（1996）も大学生を対象にアイデンティティ地位とサークル・テストとの関連をとらえ，積極的モラトリアム地位は，時間的統合がなされておらず，過去優位的傾向になることや，拡散地位は，時間的統合の割合が最も低いことを示している。

以上のような研究により，大学生においては円の優位性はその時制に対する志向性や重要度，あるいは充実感などを示し，関連性については人格的な統合度や心理的な安定の指標などに関連するということが明らかになっている。また，前述した研究や白井（1989, 1996）の研究においても，日本の大学生のサークル・テストの一般的な傾向についての検討もなされ，優位性に関しては未来を大きく描くものが一番多く，過去を大きく描くものが一番少なく，関連性に関しては重ねて描く度合いの高い統合型が一番多くなるというほぼ一貫した結果が得られている。

次に，調査対象を大学生からさらに広げた研究について述べる。高橋（1983）は臨床群への実施を試み，青年女子，高齢者，精神病疾患者にサークル・テストと内省報告，顕在性不安検査（Manifest Anxiety Scale）とＥＰＰＳ性格検査からなる質問紙を実施している。青年女子においては円が大きい時制とその時制に対する優位性や充実度が一致する傾向が見られたが，精神病疾患者や高齢者においては安定した結果は得られていない。人格特性との関連からは，過去を現在より大きく描くものは，内省的な人格特性をもち，過去，現在よりも未来を大きく描くものは，外向的で自律的な傾向をもつという結果が得られている。また，高校生に実施したものとしては，五十嵐（1990）の研究がある。五十嵐（1990）は高校生と大学生にサークル・テストと具体的な生活領域に関する時間的展望を問う刺激語句からなる文章完成法（TP－SCT）を実施している。その結果，円の大きさは，必ずしも時間的志向性や充実感と結びつくとも言い切れず，その個人にとって大きな意味をもつ時制を示し，円の関連性は時間に対する心理的な安定度の指標になり，不安や憂慮，希望，反省や回顧などをともなって，時間の流れや変化をとらえる心理が表れていることを示唆している。

したがって，臨床群および高校生においては一貫した結果が得られておらず，特に円の優位性は必ずしも充実度やポジティブな態度を示すものではなく不安を表している場合があることも示唆されている。Koening（1979）もサークル・テストの時間的優位性の未来の優位性について，不安，統制の不足，他の否定的な要因が未来へ重きを置く場合もあることを考慮すべきであると主張している。高校生の時間的展望に関しては，近い未来に関心を持ち，遠い未来や過去については関心が薄いが，その一方で過去をもっとも肯定的に評価し，現在をもっとも低く評価することが報告されている（勝俣，1972）。また，児童期よりも青年期では未来の広がりは長くなるが，自分の将来も社会的将来も暗く漠然としたものとなるという結果（白井，1985）や，高校生は希望もあるが不安も高いとする結果もある（小宮山・松本・渥美，1966）。また，日潟・齊藤（2007）は高校生と大学生の時間的展望の様相と精神的健康との関連をとらえ，高校生では過去や現在を志向せず，未来のみを志向する者の精神的健康度は低く，大学生では同様の志向を示す者の精神的健康度は低くないことを示している。したがって，高校生と大学生では未来への志向が意味するものは異なることが示唆され，サークル・テストに表れる大きさに対する時間的態度が異なることも考えられる。しかし,このような違いを明確にとらえた研究はない。

以上のような見地から，本研究では発達的な視点を踏まえて，高校生と大学生にサークル・テストを実施し，サークル・テストにおける高校生，大学生の一般的傾向をとらえるとともに，時間的態度と精神的健康との関連から，サークル・テストによる高校生，大学生の時間的展望の特徴をとらえることを目的とする。

方　法

１）調査対象者と実施期間

①高校生：2004年11月上旬　奈良県下の公立高等学校の高校生205名（男子62名　女子143名　15－17歳　平均年齢15.93歳　SD＝0.64）

②大学生：兵庫県下の国立大学の大学生155名（男子100名　女子55名　19－23歳　平均年齢20.13歳　SD=0.80）。

２）調査手続き

質問紙調査を行った。高校生は質問紙を封筒に入れ，担任教諭に配布してもらい，後日回収した。大学生は講義後に配布し，記入してもらい，その場で回収した。

３）質問紙の内容

①時間的展望の測定：時間的展望体験尺度（白井，1994）を使用した。下位尺度は「過去受容」（4項目），「現在充実」（5項目），「目標指向性」（5項目），「希望」（4項目）である。5件法で「とても当てはまる」（5点）から「全く当てはまらない」（１点）とする。逆転項目は補正して得点を与え，各下位尺度の平均値を各下位尺度得点とする。得点が高いほど肯定的な時間的態度があることを示す。

②精神的健康度の測定：日本版GHQ28　精神健康調査票（中川・大坊，1985）を使用した。下位尺度は「身体的症状」，「不安と不眠」，「社会的活動障害」，「うつ傾向」で各7項目である。4件法（精神的健康度が高い順に0－3点）で下位尺度の平均値を各下位尺度得点とする。得点が高いほど精神的健康度は低いことを示す。

③サークル・テスト：Cottle（1967），都筑（1993, 1999）を参考に，「過去・現在・未来がそれぞれ円で表せると仮定して，あなた

自身の過去・現在・未来の関係について，あなたが感じていることをもっとも表すように3つの円を描いてください。描き方は自由です。異なる大きさの円を使っても構いません。描き終わったら，どの円が過去・現在・未来かがわかるように書き入れてください。」と表記し，1辺12cmの正方形の中に記入してもらった。

4）サークル・テストの結果の整理

①時間的優位性：未来の円が一番大きく描かれているものを「未来」，現在の円が一番大きく描かれているものを「現在」，過去の円が一番大きく描かれているものを「過去」，すべての円が同じ大きさで描かれているものを「同じ」として分類した。調査対象者のイメージを重視するため，顕著に大きさが異なると判定できないもの，および，添え書きとして「同じ大きさ」と書かれていたものを「同じ」として判定した。

②時間的関連性：3つの円が完全に離れているものを「原子」，接しているものを「接合」，交わっているものを「交わり」，円が他の円に包含されているものを「包含」として分類した（Figure 1）。時間的関連性の分類においてはCottle（1967）の分類法と異なるが，過去，現在，未来に対する認知的な側面をより明確にとらえるために，上記のような分類法を採用する。

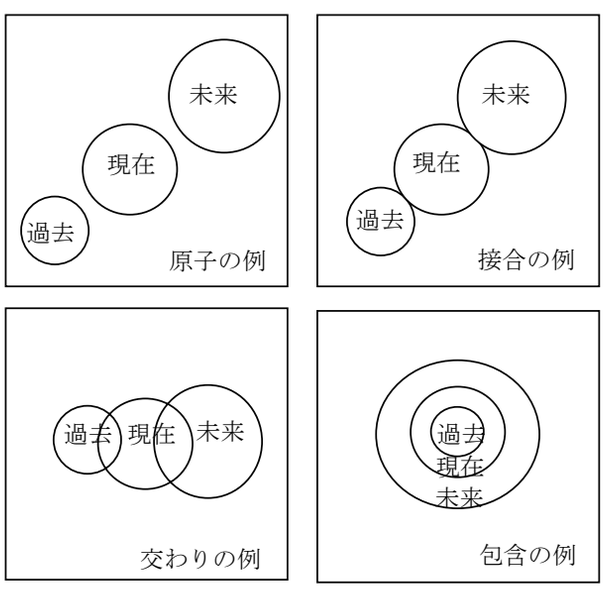

Figure 1　時間的関連性の分類例

結　果

1）高校生と大学生の時間的優位性と時間的関連性の割合の検討

時間的優位性については，調査対象者のうち未記入のもの，不備のあるもの，判定不可能なものを除いた，高校生197名（男子60名，女子137名），大学生146名（男子95名，女子51名）を分析の対象とした。

①時間的優位性

高校生では割合の高い順番に「未来」（n＝95 ），「現在」（n＝75），「過去」（n＝15），「同じ」（n＝12）となり，大学生では「未来」（n＝79），「現在」（n＝45），「同じ」（n＝13），「過去」（n＝9），の順番であった。高校生と大学生の時間的優位性の割合をFigure 2に示す。高校生と大学生においてカイ二乗検定を行ったところ人数に有意な偏りは見られなかった。高校生において時間的優位性でカイ二乗検定を行ったところ，有意な人数の偏りが見られた（$\chi 2$（3）＝107.95，p＜.001）。同様に大学生にも有意な人数の偏りが見られた（$\chi 2$（3）＝87.31，p＜.001）。残差分析を行ったところ，高校生，大学生ともに「未来」が多く，次いで「現在」，「過去」・「同じ」となった（p＜.01）

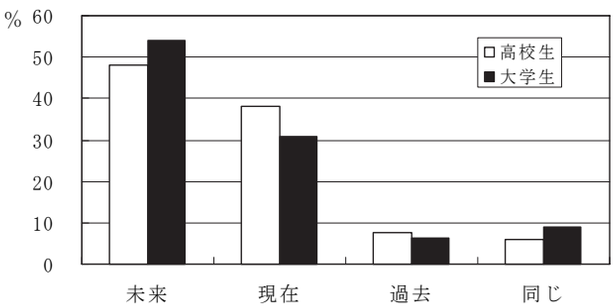

Figure 2　高校生と大学生の時間的優位性の割合

②時間的関連性

時間的関連性については，調査対象者のうち未記入のもの，不備のあるもの，判定不可能なものを除いた，高校生176名（男子48名，女子128名），大学生134名（男子85名，女子49名）を分析の対象とした。

高校生では割合の高い順番に「交わり」（n＝72），「原子」（n＝54），「包含」（n＝30），「接合」（n＝20）となり，大学生においても「交わり」（n＝55），「原子」（n＝40），「包含」（n＝29），「接合」（n＝10）の順番で同様の結果が得られた。高校生と大学生の時間的関連性の割合をFigure 3に示す。高校生と大学生においてカイ二乗検定を行ったところ人数の有意な偏りは見られなかった。高校生において時間的関連性でカイ二乗検定を行ったところ，有意な人数の偏りが見られた（$\chi 2$（3）＝37.63，p＜．001）。同様に大学生にも有意な人数の偏りが見られた（$\chi 2$（3）＝32.15，p＜.001）。残差分析を行ったところ，「交わり」が一番多く，次いで「原子」，「包含」，「接合」の順番であった（p＜.01）。

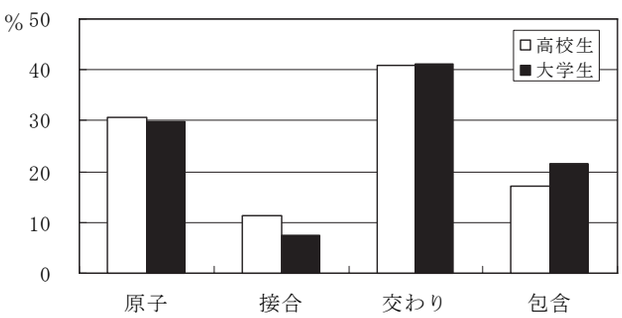

Figure 3　高校生と大学生の時間的関連性の割合

2）高校生と大学生のサークル・テストと時間的展望，および精神的健康との関連

①時間的優位性における時間的展望体験尺度と精神的健康尺度（G

ＨＱ28）の分散分析の結果（Table 1）

高校生においては時間的展望体験尺度の各下位尺度得点に有意な差は見られなかった。ＧＨＱ28では下位尺度である「不安と不眠」において未来を一番大きく描いた者が現在を一番大きく描いた者よりも高い傾向が見られ，「社会的活動障害」では未来を一番大きく描いた者が現在を一番大きく描いた者よりも有意に高かった。

大学生では時間的展望体験尺度の下位尺度である「目標指向性」，「希望」に有意な差が見られ，未来を一番大きく描いた者が現在を一番大きく描いた者よりも高く，未来をポジティブにとらえていた。精神的健康度においては各下位尺度に有意な差は見られなかった。

②時間的関連性における時間的展望体験尺度と精神的健康尺度（ＧＨＱ28）の分散分析の結果（Table 2）

高校生においては，時間的展望体験尺度の各下位尺度，ＧＨＱ28の各下位尺度ともに各グループにおいて有意な得点の差は見られなかった。

大学生では，時間的展望体験尺度の下位尺度である「過去受容」に有意な差が見られ，過去の円を現在の中に包含し，現在の円を未来の円に包含して描いた「包含」が，3つの円をすべて離して描いた「原子」よりも高かった。また，精神的健康度では「社会的活動障害」と「うつ傾向」に有意な差が見られ，「原子」が「包含」よりも有意に高く，精神的健康度が低いことが示された。

Table 1
高校生，大学生の時間的優位性における時間的展望体験展望尺度，および精神的健康度（ＧＨＱ28）の平均値（ＳＤ）と分散分析の結果

			サークル・テストの時間的優位性				F値		
			未来	現在	過去	同じ		有意確率	多重比較
			n=75	n=96	n=15	n=12	df=(3,193)		
高校生	時間的展望体験尺度	過去受容	3.47 (0.69)	3.61 (0.78)	3.17 (0.87)	3.69 (0.73)	1.80		
		現在充実	3.03 (0.95)	3.14 (0.86)	2.91 (1.00)	3.23 (0.82)	0.48		
		目標指向性	3.24 (0.99)	2.95 (0.99)	3.07 (0.93)	3.48 (0.88)	1.73		
		希望	3.25 (0.73)	3.12 (0.70)	3.10 (0.67)	3.23 (0.67)	0.55		
	ＧＨＱ28	身体的症状	1.25 (0.57)	1.11 (0.56)	1.29 (0.59)	1.48 (0.59)	1.87		
		不安と不眠	1.25 (0.60)	1.02 (0.54)	1.21 (0.60)	1.08 (0.46)	2.44	p＜.10	未来＞現在
		社会的活動障害	1.26 (0.53)	1.07 (0.33)	1.08 (0.42)	1.18 (0.28)	3.01	p＜.05	未来＞現在
		うつ傾向	0.68 (0.71)	0.48 (0.60)	0.50 (0.62)	0.44 (0.49)	1.49		
			n=79	n=45	n=9	n=13	df=(3,142)		
大学生	時間的展望体験尺度	過去受容	3.72 (0.78)	3.70 (0.70)	3.69 (0.62)	3.69 (0.90)	0.01		
		現在充実	3.30 (0.86)	3.32 (0.97)	2.93 (0.74)	3.40 (0.54)	0.60		
		目標指向性	3.49 (0.93)	2.72 (0.76)	2.91 (0.84)	3.20 (0.81)	7.84	p＜.001	未来＞現在
		希望	3.41 (0.63)	2.98 (0.76)	3.14 (0.69)	3.31 (0.42)	4.04	p＜.001	未来＞現在
	ＧＨＱ28	身体的症状	1.04 (0.69)	1.03 (0.71)	1.19 (0.66)	0.72 (0.60)	1.04		
		不安と不眠	1.12 (0.61)	0.93 (0.53)	1.05 (0.58)	0.90 (0.46)	1.27		
		社会的活動障害	1.00 (0.48)	1.07 (0.43)	1.19 (0.35)	0.89 (0.21)	1.03		
		うつ傾向	0.55 (0.64)	0.41 (0.42)	0.78 (0.74)	0.29 (0.37)	1.99		

Table 2
高校生，大学生の時間的関連性における時間的展望体験展望尺度，および精神的健康度（ＧＨＱ28）の平均値（ＳＤ）と分散分析の結果

			サークル・テストの時間的関連性				F値		
			原子	接合	交わり	包含		有意確率	多重比較
			n=54	n=20	n=72	n=30	df=(3,172)		
高校生	時間的展望体験尺度	過去受容	3.58 (0.57)	3.38 (0.81)	3.48 (0.75)	3.48 (0.84)	0.45		
		現在充実	2.95 (0.91)	3.21 (0.76)	3.13 (0.90)	3.15 (1.00)	0.65		
		目標指向性	3.12 (0.97)	3.18 (1.04)	3.15 (1.03)	3.27 (0.94)	0.16		
		希望	3.10 (0.72)	3.26 (0.71)	3.14 (0.78)	3.35 (0.44)	1.00		
	ＧＨＱ28	身体的症状	1.23 (0.54)	1.18 (0.49)	1.24 (0.63)	1.15 (0.46)	0.23		
		不安と不眠	1.10 (0.54)	1.12 (0.65)	1.21 (0.60)	1.20 (0.56)	0.40		
		社会的活動障害	1.13 (0.42)	1.12 (0.34)	1.20 (0.48)	1.12 (0.38)	0.47		
		うつ傾向	0.66 (0.71)	0.58 (0.58)	0.58 (0.68)	0.47 (0.63)	0.49		
			n=40	n=10	n=55	n=29	df=(3,130)		
大学生	時間的展望体験尺度	過去受容	3.35 (0.82)	4.00 (0.77)	3.75 (0.66)	3.88 (0.73)	4.19	p＜.01	原子＜包含
		現在充実	3.14 (0.89)	3.10 (1.08)	3.30 (0.74)	3.41 (0.87)	0.73		
		目標指向性	3.13 (1.02)	2.94 (1.28)	3.27 (0.80)	3.29 (0.92)	0.52		
		希望	3.14 (0.63)	3.43 (0.73)	3.30 (0.65)	3.38 (0.67)	0.99		
	ＧＨＱ28	身体的症状	1.04 (0.69)	0.79 (0.72)	1.17 (0.66)	0.86 (0.65)	1.86		
		不安と不眠	1.12 (0.60)	0.94 (0.65)	1.11 (0.54)	0.91 (0.55)	1.12		
		社会的活動障害	1.20 (0.52)	1.03 (0.39)	1.01 (0.41)	0.90 (0.37)	2.78	p＜.05	原子＞包含
		うつ傾向	0.77 (0.75)	0.34 (0.43)	0.51 (0.57)	0.32 (0.44)	3.65	p＜.05	原子＞包含

考　察

1）サークル・テストにおける青年期の一般的傾向の検討

①時間的優位性

高校生と大学生による有意な差は見られなかった。Tismer（1987）や五十嵐（1990）においても青年期の年齢差による時間的優位性の有意な差は見られていない。高校生と大学生ともに，物理的な未来の長さは長いため，そのような認知的な側面が円の大きさに強くあらわれたことが示唆される。先行研究においても，青年期では未来を一番大きく描く割合が高く，順に「現在」，「過去」となることが示されており，本研究でもそれを支持する結果となった。しかしながら，都筑（1984）の研究では大学生を対象とした場合，未来優位が約80％であり，五十嵐（1990）の研究においても高校生，大学生ともに70％を超えている。その他の研究においても，本研究よりも未来優位の割合が高い傾向が見られており（藤岡，1986；渡辺・赤嶺，1996），本研究では現在優位の割合が先行研究よりも高い結果となった。

現在志向の視点からとらえると，従来の時間的展望の研究では，未来志向が良いものとされ，現在志向は刹那的，楽観的な志向として重視されない傾向にあった。しかし，近年では現在志向のもう一つの側面として，現在を大切に精一杯生きることを望む現在主義の意義が主張されるようになってきた（白井，1995；柏尾，1998）。また，園田（1996）は，現在的な展望は必ずしもすべてが刹那主義

ではなく，現在の自分の志向性を察知し，現在によりよく対応する積極的な面があるとして，現代の青年の傾向であることを述べている。現在優位の割合が本研究で高かったことはこれらの傾向を反映している可能性も考えられる。

②時間的関連性

高校生，大学生ともに「交わり」が多く，次いで，「原子」，「包含」，「接合」の順番となった。同じ分類法で高校生と大学生に実施している五十嵐（1990）の結果と同じ結果となった。有意差は見られていないが，高校生よりも大学生に「包含」が多く，「接合」に高校生が多い点においても同様の結果となっている。その他の先行研究においては，Cottle（1967）の得点化を実施し，本研究と分類の仕方が異なるため，完全な比較はできないが，先行研究では，「統合」，「原子」，「接合」となる場合が多く見られ（藤岡，1986；柏尾・石井・高木，2006；白井，1989；都筑，1984；渡辺・赤嶺，1996），「統合」は本研究での，「交わり」と「包含」を合わせたものとなるため，本研究と同様の傾向が見られている。したがって，一般的傾向としてとらえることが可能であると考えられる。

高校生，大学生ともに「交わり」の割合が高かった。Lewin（1951　猪俣訳）は，青年期は時間的展望の拡大する時期であるとともに時間的展望の分化期であるとし，時間的展望を再構築しなければならないと述べている。また，青年期に過去の出来事への意識が未来への志向性に影響をあたえることも示されている（奥田，2002，2005；尾崎・上野,2001；白井，2001）。したがって，青年期には過去から未来を関係づけるという意識が働く時期であり，そのため，青年期に「交わり」が多くなることも推測される。

2）サークル・テストと時間的態度，および精神的健康との関連

①時間的優位性（Table 1）

高校生では時間的展望体験尺度のすべての下位尺度に有意な差は見られなかった。しかし，その一方で高校生には未来を大きく描く者が現在を大きく描いた者よりも「不安と不眠」や「社会的活動障害」を感じていた。時間の優位性が時間的態度に関連せず，精神的健康に関連したことは，未来の大きさが必ずしも充実度を表しているのではなく，その時制に対する不安などの投影でもあるとするKoeing（1979）や五十嵐（1990）を支持する結果となった。日潟・齊藤（2007）は高校生と大学生の時間的展望と精神的健康との関連をとらえ，高校生は大学生とは異なり，未来のみに目を向けることは心理的な負担を伴うことであることを示唆している。未来を大きく描くことと未来展望に対するポジティブな感情に関連が見られなかったことや，未来を大きく描いた者の精神的健康度が高くなかったことは，そのような高校生の未来を志向することへの心理的な不安感を示すものであるとも考えられる。高校生を対象とするサークル・テストについては，未来の円の大きさが必ずしも未来へのポジティブな態度を示さない場合もあることを検討する必要性が示唆された。

大学生では未来を一番大きく描いた者が，現在を一番大きく描いた者よりも時間的展望体験尺度の未来展望である「目標指向性」と「希望」の得点が有意に高く，未来をポジティブにとらえていることが示唆された。大学生においては時間的優位性については充実度や重要度を示すことが前述したように先行研究によって示されており，本研究でも同様の結果が見られた。また，大学生には精神的健康との関連は見られなかった。日高・前田（1989）が高校生と大学生の時間的展望を自我強度の視点からとらえた結果，高校生は自我の強度の高低に関わらず時間的展望の広がりは変わらないが，大学生では自我強度の高い者は一定した広がりのもとに将来の重要な出来事を位置づけているといった違いが見られている。したがって，高校生ではCottle（1967）のいう時間の直線的な概念である現実的な時間の流れに対する認知的な側面が反映される傾向にあり，大学生では認知的な側面に加えて，感情的な側面が反映されることも推測される。

②時間的関連性（Table 2）

高校生では時間的展望体験尺度のすべての下位尺度，および精神的健康尺度のすべての下位尺度においてグループ間に有意な差は見られなかった。高校生の時間的関連性については五十嵐（1990）が高校生の思い描く未来は大学入試に象徴されるように画一化したもので，過去や未来とのつながりは弱いものであるとしている。そのようなつながりの弱さから時間的関連性と過去，現在，未来への態度が精神的健康に関連しなかったとも考えられる。

一方，大学生では時間的展望尺度の下位尺度である「過去受容」において「包含」が「原子」より有意に高く，精神的健康尺度においても「社会的活動障害」と「うつ傾向」において「包含」が「原子」よりも有意に得点が低い結果となり，精神的健康度が高いことが示された。大学生においては時間的展望がより構造化されてまとまりを持った強い関係づけの中でとらえられる発達段階になるとされる（五十嵐，1990）。冨安（1997）の進路決定自己効力感と時間的展望の関連の研究では，過去，現在，未来が統合されているほど自己効力が高いことが示され，進路選択と計画立案には過去，現在，未来を総合的に考慮することが必要となることが示唆されている。また，大学生を対象とした研究によって時間的関連性と未来優位性（白井，1989）や自己実現，自発性，内面への志向など（Getsinger，1975）と正の関連があることも示唆されている。さらには，前述したようにアイデンティティとの関連においてもアイデンティティ達成地位の者には統合型が見られることも示されている（都筑，1999；渡辺・赤嶺，1996）。本研究で，過去受容や精神的健康と時間的関連性が関連したことからも，大学生においては，現実的な進路選択が直前にせまり，モラトリアムの仕上げの時期として，自己の方向性を考える上で，時間の統合が必要となり，それができるか否かが大学生の重要な課題となることを示すものであると考えられる。

総合考察

高校生と大学生において，時間的優位性と時間的関連性の傾向には顕著な違いは見られなかったが，それにあらわれる時間的態度と精神的健康には違いが見られた。高校生では，未来を大きく描く者の精神的健康度は低く，未来を大きく描くことが必ずしも未来に対するポジティブな志向を意味するものではないことが示された。それに対して大学生では未来を大きく描く者は未来に対してポジティブなイメージを抱いていることが示された。また，時間的関連性においては，高校生では時間的態度や精神的健康度に関連が見られ

ず，自己の投影として時間を意識し，時間を統合するイメージが低いことが推測されたのに対して，大学生では時間の統合ができるか否かが精神的健康と関連し，時間の統合が重要な課題となることが示唆された。高校生では時間的優位性が精神的健康度と関連し，大学生では時間的関連性が精神的健康度と関連したことは，時間意識に対する発達的特徴であるとも考えられる。

文　献

Cottle，T. J. （1967）. The circles test：an investigation of perception of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*，**31**，58-71.

Cottle，T. J. （1976）. Perceiving time. *A psychology investigation with men and women:* New York:Jhon Wiley&sons.

藤岡秀樹（1986）. 青年の「生き方」の類型と時間的展望　教育心理，**34**，138-143.

Getsinger. S. H. （1975）. Temporal relatedness： Personality and behavioral correlates. *Journal of Personality Assessment*，**39**，405-408.

日潟淳子・齊藤誠一（2007）. 青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連.　発達心理学研究，**18**，109-119.

日高三喜夫・前田重治（1989）. 青年の時間的展望に関する研究―年齢と自我強度の効果―　九州大学教育学部紀要（教育心理学部門），**34**，299-308.

五十嵐敦（1990）. 青年期の時間的展望－Cottle’s Circles Testの検討と分析.　カウンセリング研究，**23**，133-141.

柏尾眞津子（1998）. 青年期における時間的展望と対人志向性との関連　関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究，**48**，57-70.

柏尾眞津子・石井京子・高木　修（2006）. 高齢者と大学生の時間的展望―サークル・テストの比較―　日本発達心理学会第17回大会発表論文集，407.

勝俣暎史（1972）. 高校生の時間的展望　熊本大学教育学部紀要（人文科学），**21**，149-161.

木村　敏（1982）. 時間と自己　中央公論新社

Koenig. F. （1979）. Future orientation and external locus of control. *Psychological Reports*，**44**，957-958.

小宮山要・松本恒之・渥美泠子（1966）. 非行少年の意識態度に関する研究　科学警察研究所報告（防犯少年編），**7**，1-8.

Lewin，K. （1951）. *Field theory in social science : Selected theoretical papers.* New York: Harper&Brothers.（レヴィンK，猪俣佐登留（訳）（1979）. 社会科学における場の理論.誠信書房）

Lewin，K. （1954）. *Time perspective and moral.* New York：Houghton Mifflin.
（レヴィンK. 末永俊郎（訳）（1942）. 時間的展望とモラール東京創元社）

中川泰彬・大坊郁夫（1985）. 日本版GHQ 精神健康調査票《手引き》　日本文化科学社.

奥田雄一郎（2002）. 時間的展望研究は人間の過去に対していかにアプローチするか－記憶研究との対比から　中央大学大学院研究年報，**32**，167-179.

奥田雄一郎（2005）. 時間のはじまり，物語のはじまり－時間的展望の発生とナラティヴの発生の関連についての実験的検討　中央大学大学院研究年報，**34**，175-185.

尾崎仁美・上野淳子（2001）. 過去の成功・失敗体験が現在や未来に及ぼす影響－成功・失敗経験の多様な意味　大阪大学大学院人間科学研究科紀要，**27**，63-87.

白井利明（1985）. 児童期から青年期にかけての未来展望の発達　大阪教育大学紀要Ⅳ部門，**31**，61-70.

白井利明（1989）. 現代青年の時間的展望の構造（2）:サークル・テストとライン・テストの結果から　大阪教育大学紀要第Ⅳ部門，**38**，183-196.

白井利明（1994）. 時間的展望体験尺度の作成に関する研究　心理学研究，**65**，54-60.

白井利明（1995）. 現代における“ポジティブな現在志向”の意義と検討課題　大阪教育大学教育研究所報，**30**，61-68.

白井利明（1996）. 日本の女子青年の時間知覚におけるCottleの仮説の検討:サークル・テストとライン・テストの結果から　大阪教育大学紀要第Ⅳ部門，**44**，209-218.

白井利明（2001）. 青年の進路選択に及ぼす回想の効果：変容確認法の開発に関する研究（1）大阪教育大学紀要:第Ⅳ部門，**49**，133-157.

園田直子（1996）. 非目標的な時間的展望に関する考察　久留米大学文学部紀要人間科学科編，9・10，45-61.

高橋君江（1983）. 時間的展望の測定技法に関する研究（Ⅰ）: Circles Testの妥当性について　日本女子大学紀要（家政学部），**30**，15-24.

高橋君江（1985）. 時間的展望の測定技法に関する研究－Circles Testの妥当性と信頼性について　共栄学園短期大学研究紀要，**1**，165-176.

田中良子（1974）. サークルテスト－過去・現在・未来に対する認知とパーソナリティ　日本心理学会第38回総会発表論文集，518-519.

Tismer.K.G.（1987）. Psychological aspects of temporal dominance during adolescence. Psychological Reports，**61**，647-654.

冨安浩樹（1997）. 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連　教育心理学研究，**45**，329-336.

都筑　学（1984）. 青年の時間的展望の研究　大垣女子短期大学研究紀要，**19**，57-65.

都筑　学（1993）. 大学生における自我同一性と時間的展望　教育心理学研究，**41**，40-48.

都筑　学（1999）. 大学生の時間的展望:構造モデルの心理学的検討　中央大学出版部

渡邊恵子・赤嶺淳子（1996）. 大学生のアイデンティティ地位・充実感・時間的展望－学年差・性差の検討　人間研究（日本女子大学），**32**，25-35.